

黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.75 (March 30, 2013)

第75号 2013年3月30日

例会発表要旨

10月例会 2012年10月20日 キャンパスプラザ京都

「アフリカの角」における民族紛争＝分離独立について — スーダン、ソマリアを中心に

岡倉 登志

はじめに 第二次大戦後の世界の分断国家と分離独立：
植民地政策、東西冷戦構造（朝鮮、ヴェトナム、インドーパキスタンーバングラデシュ）
ソ連邦の崩壊（ウクライナ、ヴェラルーシ、アゼルヴァイジャンなど）、
近年でもヨーロッパでイタリア、スコットランド、スペインなどにも分離の動向。

アフリカにおけるバルカン化と統合原理：

大ソマリア主義、エチオピア第一主義、性格を異にするがパン・アフリカニズムも統合原理
ベルリン会議の国境線を部分変更（世界大戦ー旧ドイツ、イタリア領：タンザニア、ナミビア、エチ
オピア、カメルーンなど）ウティ・ポシデティスの原則（民族文化より戦争回避の現状維持）

2013年1月アルジェリアでの人質問題ももとはマリでのトンブクトゥ独立問題で、統合より文化
的アイデンティティ重視が21世紀の傾向に。沖縄やアイヌの自立化も再度論議に

1. 「アフリカの角」と分離独立問題

報告者が関心、研究したのは主に歴史的経緯：1970年代ー修士論文 1970、立命館人文研紀要、
『歴史学研究』[大会全大会報告]などの論文と『ブラック・アフリカの歴史』1980年代以降『アフリ
カの世界』1984 三章、『アフリカ史を学ぶ人のために』五章 1996 でソマリア内戦、『アフリカの歴
史』2001、『ハンドブック現代アフリカ』2002

2. ソマリアについて

3. 南部スーダンー今回は言及できない

ルドルフ・フィッシャーとまじない師のシグニファイン

平尾 吉直

ルドルフ・フィッシャー『まじない師の死』(1932)は、アフリカ系アメリカ人による推理小説の嚆矢となった作品である。この作品で、フィッシャーは禍々しい別世界を求める白人読者の期待に応えるように見せながら、意外な展開と結末によってハーレムを怪しげなアフリカ像から解放する。ある日、ハーレムの一角で開業するアフリカ人まじない師フリンボが、顧客の相談を受けている間に何者かに殺される。小説の前半、被害者の死を確認したアーチャー医師は、ハーレム警察唯一の黒人警部ダートとともに事件解決に当たる。顧客の一人を犯人として事件が落ち着するかと思われた矢先、死んだはずのまじない師フリンボが復活し事件は振り出しに戻る。以後、物語は捜査の主導権をめぐるダート／アーチャーとフリンボの対決に移行する。結局、まじない師にしてマッド・サイエンティストであるフリンボの誇大妄想による殺人というアーチャーの推理は、フリンボに妻を寝取られた夫の嫉妬という陳腐な結末によって覆される。こうした陳腐な結末は禍々しいゴシック的な結末を望んだ白人読者を拍子抜けさせるものであったろう。また、まじない師フリンボは価値を転倒させるエシュ＝レグバ的存在として描き出され、解釈するものが解釈されるもの、解釈されるものが解釈するものになるシグニファイン的な関係のなかで西洋／アフリカという二項対立は無効にされる。人種的ステレオタイプを強調したアニメーション映画で使われた歌「アイル・ビー・グッド・イフ・ユー・アー・デッド、ラスカル・ユー」が作品中何度も挿入されるが、最後のシーンで歌はそれが喚起する原始人のイメージを剥ぎ取られ、恋人を奪われた男のハートブレイクソングとして響く。こうした戦略が『まじない師の死』という作品を、ハーレムに関する既存の言説に対するシグニファイン的な試みにしているのである。

「アフリカ系アメリカ人女性史におけるアフリカーナ・ウーマニズム」

森川 鈴子

本発表は、1970年代後半から80年代にかけて理論として確立してきた「アフリカーナ・ウーマニズム」を、西洋のフェミニズムと比較し、17-18世紀まで遡るアフリカ系アメリカ人の女性史に言及しながら紹介していくというものである。最初に、社会学、歴史、文学など様々な分野に広がった黒人女性研究の最近の学者たち、ポーラ・ギディングス、パトリシア・ヒル・コリンズ、ドロレス・オールドリッジ教授たちの研究書などを短く紹介した。その後、アメリカ黒人女性のアフリカ本土や奴隷制時代からの特異な歴史、特にアメリカ黒人文化を作り上げ、その文化を継承して行く際にアメリカ黒人女性がいかに大きな役割を担ったか、という点を強調して説明し、その中で、どのようにしてアフリカーナ・ウーマニズムの理論が生まれたか、ということを概説した。最後に、大きく分けて経済面、政治面、イデオロギー(観念)面に顕著である、現在にも続くアメリカ黒人女性に対する差別がいかなるものか具体的に解説し、いかにアフリカーナ・ウーマニズムを理論、

視点として研究に取り入れていくことが重要であるかを論じた。

2月例会 2013年2月23日 キャンパスプラザ京都

① 学習者中心主義(learner-centeredness)の視点による授業の組み立て — 視聴覚機器と歌を用いて

阪口 瑞穂

アメリカ社会において黒人がマイノリティの立場に置かれているのと同じように、教育においても教師主導型の授業が多いため、生徒は主体的に授業に参加できない場合がある。本発表では、学習者中心主義の立場にたつてどのような授業をすればよいか実践例を交えて報告した。学習者中心の授業を行うには「生徒間あるいは生徒と教師の間での対話が必要」(Richards, 1996)であり、教師は「学習者のサポーター」として「生徒1人1人の人格を尊重する」(玉井, 1994)のである。授業で、Janis Ianの歌“Will You Dance?”を用い、小説『チャーリーとチョコレート工場』と比較しつつ、タイトルの意味を生徒に考えてもらい、英語でディスカッションを行ってもらった。その際、歌の歴史的背景の説明、日英の歌詞の配布、ポジティブとネガティブに歌詞を分けることが発話を促すのに有効であった。また映画の脚本(Paul Auster, *Smoke*)やおとぎ話をテキストに用いた授業では、トピックを決めて毎回英語でディスカッションを行い、学期末にレポートのプレゼンを行ってもらった。OHPまたはPowerPointの視聴覚機器を用いてプレゼンを行うことは発表の質を高め、聞き手の興味を引いた。プレゼンの方法(アイコンタクト、ジェスチャー)を学び、Evaluation Sheetに聞き手の意見を書くことで、発表者・聞き手の双方でプレゼンは成り立つという認識が学習者の間に生まれた。

② 「ヒップホップにおける商業化の再考 — 『支配』の言説から知識としてのヒップホップによる商業化論へ」

阿津坂 祐樹

ヒップホップとは1970年代、ニューヨーク市の黒人、ラテン系居住区で生まれ、商業化されることでアメリカ全土へと広まったストリート文化である。今日、知識や企業家精神など、思想的な要素をも含んで構成されるヒップホップは、「ひとつの生き方(a way of life)」としてこれまで多くの若者に希望と行動指針を与えてきた。

1979年以降、新自由主義の台頭や、ブラックナショナリズムの再興と同時期に、ヒップホップの商業化が開始された。このことは、黒人ゲットーに生きる若者にとって、ゲットーから抜け出すための合法的な経済機会の登場を意味した。そして現在、ヒップホッパーは、アーティスト業で成功するだけでなく、ヒップホップ実業家(Hiphop mogul)として積極的に大規模な事業参入を果たすようになった。

ヒップホップの商業化について、これまで多くの研究で用いられてきたのが「支配(co-optation)」の言説である。「支配」の言説とは、ヒップホップの商業化を「ヒップホップ文化が大企業によって乗っ取られ、支配される」過程であるとみなす議論である。この背景としては、当

初から多くのアーティストが企業との搾取的な契約によって、芸術と商業の両面において、自己決定権をはく奪されてきたことが挙げられる。

しかし近年、「支配」の言説に対して、修正的な見方がなされるようになってきた。なぜなら、「支配」の言説では、ヒップホップの文化的文脈を維持しつつも、経済的成功を収めるというヒップホップ実業家の在り方を十分に説明することができなかったからだ。この新しい見方では、ヒップホップ文化と経済的成功の両立は可能であり、この両立の中でヒップホップは自身を再定義、再構築していると論じられてきた。

本発表は、以上の先行研究を補完する形で、「ヒップホップ実業家は、どのようにして商業化を進めるのか」という問題を提起する。そしてこの問いに対し、「(彼ら・彼女らは)知識としてのヒップホップを、経済活動において活用することで、商業化を進めている」という結論を提示するものである。本論では、ヒップホップ実業家:ジェイ Z の商業化戦略を、バトル(Battling)、企業家精神(Street Entrepreneurialism)、スタイル(Style)、自己統治(Self-governance)というヒップホップの諸概念によって説明することを試みた。そこから、具体性を伴うヒップホップが、知識としてのヒップホップとして抽象概念化されることで、経済活動へと適応される過程が明らかになる。知識としてのヒップホップを用いた商業化の促進は、「支配」の言説を越えた新たな視点を提供する。

報告

2012年12月11日から14日までの4日間にわたり、韓国の釜山で韓国英文学会年次大会が開催され、木内徹、伯谷嘉信、森あおい、西本あづさ、宮本敬子、中地幸、福島昇(日本大学)の各氏が参加された。大会の様子は「会員からの投稿」欄に掲載している。

会員からの投稿

プラーキ研究、『ジュリアス・シーザー』観劇、ASAUK 学会参加報告

溝口昭子

2012年8月31日～9月11日に、資料収集と学会参加のため英国に滞在した。様々な図書館で南アのアフリカ人作家、ジャーナリスト、政治家(ANCの前身 SANNCの創立メンバー)であるソル・プラーキ(Sol Plaatje, 1876-1932)関連資料を収集しつつ、その間ロンドンで、アフリカを舞台に演出された『ジュリアス・シーザー』を観る機会があり、プラーキとシェイクスピアの関係を考える上で啓発された。また、リーズ大学で9月6-8日に開催された ASAUK (African Studies Association of the UK)の学会では、プラーキについて発表を行い、他の興味深い発表に触れる機会にも恵まれた。今回は『ジュリアス・シーザー』鑑賞に関連づけてシェイクスピアとプラーキについての雑感、さらに学会について報告させていただく。

(1) アフリカ、シェイクスピア、そしてプラーキ

プラーキはその著作でシェイクスピアに度々言及・引用し、またその作品を自分の母語であるツワナ語に訳している。それは、彼が20世紀初頭に次々と進められたアパルトヘイト的政策にナショナリストとして抗議する時に「一定の収入と教育を受けた成人男子に等しく選挙権を与えた19世紀ケープ植民地のリベラルな政策を享受した『文明化されたアフリカ人』」としてリベラルな白人読者に向けて語る必然性と無関係ではなかっただろう。彼が「一人の南アフリカ人の(シェイクスピアへの)敬意」(“A South African’s Homage”)で、妻となる女性エリザベス(彼女とは民族が異なる故に、最初の共通言語は英語)に求愛中に、二人とも家族の結婚反対を想起させる『ロミオとジュリエット』を読んだことをユーモラスに語るあたりなど、そういった印象を与えている。

しかし、彼はシェイクスピアの世界と当時の南アの状況に親和性があり、それゆえにその作品がアフリカ人にとって有効なテキスト(口承文芸としての可能性も含め)であることにも気づいてもいた。キンバリーで彼が『ヴェニス商人』をアフリカ人聴衆に語り聞かせると、その生々しさに「シェイクスピアがシャイロックと呼ぶ人物」はキンバリーのどのダイヤモンド採掘者のことなのかと聞かれることすらあったと記している。そして南アの原住民土地法(1913)によって土地を奪われたアフリカ系住民の苦境を英米に訴える書『南アフリカにおける原住民の生活』(*Native Life in South Africa*, 1916)では、彼はアフリカ人が土地を奪われたことに際し白人を抑圧者と呼び、彼らへの怒りを、領土を与えた娘たちから全てを奪われたリア王の叫びを引用して表現している。

では、プラーキはどのような意図でシェイクスピアの劇をツワナ語に翻訳したのか? 「未開な同胞」に「文明国の古典」を紹介する目的だったという植民地主義的視点だけでは語れないだろう。最近の批評では、彼が「失われつつあった」母語を保存するために「容易には失われない容器」としてシェイクスピアを選んだ可能性が論じられている。またその翻訳にはツワナ語話者だけに分かる政治的な意味が込められていたとも言われ、それ故彼が手がけた『間違いの喜劇』のツワナ語翻訳を英語へ逆翻訳する作業が現在南アで進められている。

彼がシェイクスピアをツワナ語で「槍を振る者」(Shake-the-Sword)を意味する「チキニャ=チャカ(Tshikinya-Chaka)」と訳しており、それは「鋭い槍の民」(the people of the sharp spear)として知られている彼の民に適した訳語だと語っているのも興味深い。さらに、『間違いの喜劇』のツワナ語翻訳につけられたチキニャ=チャカ紹介文には、原住民土地法の非道さを英米で訴え続けたプラーキ自身の姿が書き込まれている。チキニャ=チャカは「卓越した作家になっても両親や故郷の小さな村に背を向けず」、「ヨーロッパ大陸や英国で社会的地位を得ても、ストラットフォード・アポン・エイヴォンの人々から奪われた権利を取り戻すため闘い続けた」(Schalkwyk 1999)のだ。

プラーキにとってシェイクスピア作品の受容は単なる「支配者文化への同化の印」ではなかった、そのポリフォニックなテキストを自らの民の過酷な状況に照らし合わせて再解釈し、植民地的近代のなかで彼とその民が文化的抹殺から身を守る鎧として、これからの闘いに向けて尖らせる槍、植民者に向けて放つ「知の槍」としても用いたのだろう。

さて、9月3日、RSCのアフリカを舞台にした『ジュリアス・シーザー』をノエル・カワード・シアターで観たのだが、まず俳優たちすべてがブラック・ブリティッシュ、つまりアフリカ系およびカリブ系移民あるいはその血を引く主に第2世代であったことは特筆すべきことだろう。演出家としても有名なジェフリー・キスーン(Jeffery Kisson)をシーザー役に迎え、映画『インビクタス負けざる者たち』でネルソン・マンデラの側近を演じたアジョア・アンドー(Adjoa Andoh)がポーシャ、RSCの実力派俳優レイ・フェアロン(Ray Fearon)(20年前にもRSC『ロミオとジュリエット』日本公演でロミオを演じた)がマーク・アントニーを演じるなど、ブラック・ブリティッシュ俳優の層の厚さを伺わせた。

そして、西アフリカや南部アフリカの様々な楽器が奏でる音楽に彩られた舞台では、古代ローマを舞台にした政治劇が、独立後のアフリカ諸国が経験してきた歴史と見事に溶け合っていた。政治家の正装姿は特定のアフリカの独裁者の姿と酷似していたし、さらに、政治的儀式で彼らがまとう黒い長衣は古代ローマと西アフリカの伝統的長衣両方に重なるものであった。そして何よりも、指導者の独裁化、暗殺、政治家たちのレトリック、煽動される民衆、都を追われゲリラ化する者たち、その全てが現代アフリカの生々しい政治的現実と重なり合っていた。

舞台のパンフレットに目を通すと、王立アフリカ協会(The Royal African Society)の代表が以下のような興味深い文を寄せていた。

「もし、シェイクスピアが今、生きていたら」とあるアフリカ人の友人が私に言った。「彼は、君よりも僕とずっと親しくなれたと思うよ。」その友人が説明するところによれば、彼とシェイクスピアであれば、聖なる森や精霊の力について語り合える。王や領主の生々しいパラノイアを理解し、そして無政府状態や政治的破局の恐怖を肌で知っている。一方で私の快適な世界は、彼が言うには、保護され、管理され、生の現実から遠いところにあるので、シェイクスピアの興味を引くことはない。ヨーロッパにいる私たちの多くにとってシェイクスピアの詩とメタファーの世界に見えるものは、アフリカではしばしば過酷な現実なのだ。

代表は続けてシェイクスピアがロンドンで目撃したであろうアフリカ人奴隷たちに言及し、さらに自らがアミン大統領時代のウガンダで『ジュリアス・シーザー』を教えたときに、高校生たちが現実の政治と重ねて理解したこと、そしてアフリカ諸国が独立し、学校の文学教育のシラバスが是正され多くの英米作家作品がアフリカ人作家作品に差し替えられたとき、シェイクスピアだけはその「普遍性」故に残されたというエピソードを紹介した。また、プラーキを含めた(彼が言及されていて大変驚いた!)多くのアフリカ人指導者たちが彼の作品を母語に翻訳した(たとえば、タンザニア初代大統領ニエレレは『ヴェニス商人』をスワヒリ語に訳す際、「商人」を「資本主義者」と訳した)こと、アパルトヘイト時代にシェイクスピアの作品がロベン島に収容されていたマンデラを含む政治囚たちを精神的に支えた等々。私はシェイクスピアとアフリカの深い関係を示す啓蒙的な紹介文に心から感謝しつつも、それが「シェイクスピアの普遍性礼賛」にやや偏っていることが気になった。それは西欧を相対化する視点がやや薄い今回の舞台についても感じたことであった。

実は、プラーキも『ジュリアス・シーザー』をツワナ語に訳しているのだが、現存する翻訳には彼の作品としての価値はない。当時「ツワナ語専門家」の白人教授が、プラーキの死後その翻訳に目を通し「ひどい誤訳だらけ」と「修正」して出版し、原本は存在していないのだ。『ジュリアス・シーザー』という政治劇の、おそらく「意図的な誤訳」にプラーキが託した政治的メッセージ(南アのヤエル・ファーバー(Yael Farber)による同作品の見事な翻案『セザール』(CeZar, 2001)に受け継がれるような)は今も失われたままである。

(2) ASUK(African Studies Association of the UK)の学会

この学会はリーズ大学アフリカ研究センターとの共催で開催された(<http://www.asauk.net/conferences/asauk12.shtml> 参照)。リーズ大学の英文科には、60年代から英連邦文学(Commonwealth Literature 今で言うところのポストコロニアル文学)を学ぶコースが設置され、同時期にこの分野の草分けとも言える学術誌『英連邦文学』(*The Journal of Commonwealth Literature*)を刊行し今に至っている。ノーベル文学賞を受賞したナイジェリア人作家ウォレ・ショインカ(Wole Soyinka)が50年代に、ケニアのグギ・ワ・ジオンゴ(Ngũgĩ wa Thiong'o)が60年代に学び、今もアフリカ英語文学をはじめとするポストコロニアル文学研究の牙城である。20年前に同大学院でこの分野を学んだ私としては、この学会への参加は感慨深いものがあった。

学会では同時時間帯に15もの発表が行われ、450以上の発表のなかで聞いたものはごく一部ではあるが、ここでいくつか紹介したい。

初日最初のパネル「リーズと文学」(“Leeds and Literature”)においては、まず、ショインカとともに舞台演出を手がけ、共著もあるリーズ大学名誉教授でアフリカ劇専門家であるマーティン・バンハム(Martin Banham)が リーズ大学とアフリカ劇の長い歩みの歴史について概観を語った。そしてハイネマン出版社からアフリカ英語文学のペーパーバック版を手がけ、今では自分の名前を冠したアフリカ研究書専門の出版社を経営するジェームズ・カリー(James Currey)が「グギ、リーズ、そしてアフリカ文学の確立」(“Ngugi, Leeds and the Establishment of African Literature”)において英語作家だったグギがリーズ時代にすでに英語で作品を書くことに疑問を呈していたエピソードを披露した。そして、その夜はグギ本人による基調講演「学問の言語におけるアフリカ」(“Africa in the Language of Scholarship”)が行われた。彼は70年代からアフリカ人作家が母語で作品を書く重要性を主張し、自らも母語であるキクユ語と英語(自身による翻訳)両方で作品を刊行することを実践しているが、ここではさらに「自分が研究する分野の言語で論文を書く必要性」を提唱した。彼が「この会場でアフリカの言語を話せ、読め、書ける者は？」と聴衆に手を上げさせると、さすがに話し読める人はそれなりに存在するが、書ける者(アフリカ人研究者も含め)はごく少数であった(ちなみに私はどれもできない)。アフリカの言語での論文執筆はその言語による学術文化発展に寄与すること、そして、その言語で書いた学位論文をアフリカの大学が受け入れる制度の整備の可能性について、成功例を紹介しながらグギは熱心に聴衆に語っていた。

2日目、「「ポストミレニアルの文脈」とアフリカ英語文学—2000年以降の執筆、生産、受容」(“The ‘Post-millennial Context’ and African Writing in English: Writing, Production and Reception since 2000)のパネルでは、ポーリーナ・グルゼダ(Paulina Grzeda)とレベッカ・ジョーンズ(Rebecca Jones)の発表が興味深かった。グルゼダの「新しい南アフリカらしさ」に向けて—2000年以降の南アフリカにおける自伝文学」(“Towards a ‘New South Africanness’: Autobiographical Writing in the Post-Millennial South Africa”)においては、2000年以降の南ア文学にみられる自伝的な要素(例:J・M・クツツエーやゼイクス・ムダ(Zakes Mda)の作品群)が、真実和解委員会が描出しきれない記憶やトラウマを表象し、南アの暴力的な歴史と再交渉し新たな南アフリカ性を希求するものとして論じられた。ジョーンズは「ナイジェリアは私の遊び場:2000年以降のナイジェリア旅行文学」(“‘Nigeria is My Playground’: Post-millennial Nigerian Travel Writing”)において、ヨルバ語と英語双方のナイジェリア旅行文学について丹念な調査に基づいた発表を行い、特に英国在住のヌー・サロ=ウィワ(NooSaro-Wiwa)(かつてのナイジェリア軍事政権に処刑された著名な作家ケン・サロ=ウィワの娘)の非政治的なナイジェリア紀行『トランスワンダーランドを探して』(*Looking for Transwonderland*, 2012)やラゴス在住のジャーナリストであるペル・アウオフェソ(Pelu Awofeso)による『ワカ=アバウト』(*Waka-About*) (同名の紙媒体、フェイスブック、著者のツイッター、ブログ等で観光情報が発信される)を通して、「観光地」としてのナイジェリア(観光地としてのイメージが薄い)を国内外の人々が想像し共有してゆくプロセスに焦点が当てられた。

「黒人女性性の表象—サラ・バートマンの遺産」(“Representation and Black Womanhood: The Legacy of Sarah Baartman”)のパネルでは、この題目と同名の批評書(2012)の編著者ガベバ・バデルーン(Gabeba Baderoon)、シーラ・スミス・マツコイ(Sheila Smith Mckoy)、ナターシャ・ゴードン・チペンベレ(Natasha Gordon Chipembere)が発表を行った。(このバートマンの存在に関しては、日本でも楠瀬佳子氏の研究、東京外国語大学で行われた、映画『サラ・バートマンの帰還』(*The Return of Sara Baartman*)上映会およびシンポジウム(2010)、そしてバーバラ・チェイス=リボウ

(Barbara Chase-Riboud)の『ホッテントットヴィーナス—ある物語』(*Hottentot Venus: A Novel*)の日本語訳出版(2012)等によって知られている。)「犠牲者であるアフリカ人女性ホッテントット・ヴィーナス」というバートマン像のステレオタイプを批判する研究がステレオタイプの再生産に陥る危険性が指摘され、それを超越する表象の可能性が語られた。特にバデルーンが「バートマンと秘められた場所」(“Baartman and the Private”)で紹介した、バートマンをレズビアン的視点から「愛する恋人」として語り直す試みが目を引いた。

自分の研究と直接関連する分野では、最終日午前中のパネル「アフリカにおけるナショナリズム省察」(“Reflections on Nationalism in Africa”)で、プラーキの伝記を執筆した歴史学者ブライアン・ウィラン(Brian Willan)による発表「ソル・プラーキのマフェキング日記再考」(“Sol Plaatje’s Mafeking Diary Reconsidered”)、そしてプラーキと同時代の南ア知識人ジョン・デューベ(John Dube)についてヘザー・ヒューズ(Heather Hughes)が行った発表「内なる敵—ジョン・デューベとナショナリズムへの失望」(“The Enemy Within: John Dube and the Disillusionments of Nationalism”)から、当時の南ア植民地エリートについて学ぶことが多かった。パネルの後2人からプラーキ関連の貴重な情報を得られたこと、特にウィランには学会終盤でも帰り始めていた午後に私の拙い発表「ナショナリズム再考—ソル・プラーキの『ムーディ』において再想像される共同体」(“Rethinking Nationalism: Re-imagining Community in Sol Plaatje’s *Mhudi*”)を聞いてくれたことに感謝したい。自分の研究方法や研究姿勢についても多くの反省を促した貴重な学会経験を今後に生かしたいと思う。

韓国英文学会年次大会でシンポジウム「越境した黒人研究—アメリカ的視点からアジア的視点へ」を企画して

木内 徹

2012年12月11日から14日までの4日間にわたり、韓国の釜山で韓国英文学会年次大会が行われ、その会長である金英敏(キム・ヨンミン)氏から黒人研究に関するシンポジウムの企画の一つ任されたので、13日に“Black Studies across the Border: From American to Asian Perspectives”(越境した黒人研究—アメリカ的視点からアジア的視点へ)というタイトルで、4人の方々をお招きして私の司会によってシンポジウムを行った。

発表者は次の4人で、以下の通り、発表タイトル、発表者、所属となっている。

- (1) “When Black Isn’t Black: ‘Black’ Studies from Asian Caribbean Perspectives,” Jade Lee (National Kaohsiung Normal University, Taiwan)
- (2) “Richard Wright’s Haiku and Eastern Poetics,” Yoshinobu Hakutani (Kent State University, USA)
- (3) “The Debate Revisited: (Dis)Placing the Ground of African American Literary Theory,” Sung-Ho Yoon (Hanyang University, Korea)
- (4) “The Resisting Narratives of Toni Morrison and Yuu Miri,” Aoi Mori (Meiji Gakuin University, Japan)

(1)の Jade Lee 氏は台湾の高雄市にある国立高雄師範大学で教える俊秀で、台湾ではカリブの専門家は彼女一人であると言っていた。この発表も大変興味深いもので、ガイアナの黒人女性

作家 Meiling Jin は中国系であることは知られておらず、Lee 氏によればまだこうした作家は多くいるとのことである。

(2)の伯谷嘉信氏はアメリカ・オハイオ州のケント州立大学教授で日本生まれ日本育ちのアメリカ文学研究者である。ライトの句集を編纂したことで知られ、黒人研究のなかでもライト研究は重要な位置を占めるが、そのライトの俳句について日本的視点で考察できる唯一の研究者であると言ってよい。

(3)のユン・スンホ氏は韓国の名門大学である韓陽(ハンヤン)大学助教授として活躍中の若手研究者で、同じく名門のソウル大学を卒業してマサチューセッツ大学アマースト校で博士号を取得した秀才である。黒人文学・文化研究理論をアジアの視点で見直すという内容の発表だった。

(4)の森あおい氏は、わが黒人研究の会の副代表で明治学院大学教授だが、トニ・モリスンと在日韓国人作家である柳美里との比較研究という貴重な発表をされた。両作家は、それぞれ表現方法を失った人々に声を与え、「家」の再構築の可能性を探っていると結んでいる。

台湾、韓国、日本、アメリカにおける黒人研究のアジア的視点という観点をめぐっての聴衆の反応は活発なものであったが、モリスンは韓国でほとんどの作品が翻訳され、『青い眼がほしい』などは3回も翻訳され直しているとのことだった。もはや、黒人研究はアメリカやヨーロッパだけのものではなく、アジアのものでもあるという思いをますます強くした。また、質問者のなかには日本の大学で博士号を取得した韓国人研究者、日本に叔母がいるという若手韓国人研究者などなど、日本と韓国の密接なつながりに改めて思い知らされた次第である。そして、全体として、韓国の英文学会年次大会のエネルギッシュな運営にも圧倒された。大会は活気溢れる釜山の海雲台というリゾート地に近い、巨大な Bexco という国際学会専用の宿泊施設付きの会場で行われ、200名以上の韓国人と60数名の外国人が発表した。このなかには別なシンポジウムでパネリストとして発表した、わが黒人研究の会会員である西本あづさ、宮本敬子、中地幸、福島昇(日本大学)もいた。伝統的太鼓のパフォーマンス付きの参加者全員を招いての宴会が行われるなど、上昇気流というか活気に満ちあふれていた。最近はずっかり沈滞ムードが漂っている日本の英文学会と一つ一つ比較してしまった。

ケビン・パウエル氏講演会レポート

阿津坂 祐樹

2013年2月21日、大阪のアメリカ領事館関西アメリカンセンターで開催されたケビン・パウエル(Kevin Powell)氏の講演会(共催:黒人研究の会)に参加した。パウエル氏は、これまで黒人ゲットー、ヒップホップからアメリカ政治まで幅広いテーマを論じてきた精力的な作家、活動家である。今回は、“**Contemporary American Politics: Dr. Martin Luther King Jr.’s Dream After 50 Years**”というテーマで、キング牧師の理念とリーダーシップから今何を学ぶのかなどについて意見を述べてくれた。司会の加藤恒彦氏(当会長)によるパウエル氏の紹介では、黒人ゲットーの母子家庭出身の彼が、いかにネガティブな誘因があふれるストリートの中で自己を保ち、ラトガーズ大学へと進学し、作家への道を進みはじめたのかという経緯が詳細に語られた。このような出自を踏まえて、機会の平等と全人類の団結の重要性を語るパウエル氏の言葉は、まことに愛と情熱にあふれたものであった。

参加者、特に若い世代へ伝えたいこととして、パウエル氏は次の4点を挙げてくれた。それは、(1)瞬間をつかむこと(Seize the moment)、つまり、いつ終わるかは誰にも分からない人生にお

いて、「今」この瞬間を何か行動することを使ってほしいという点。(2)自分の人生(の一部でも良いから)を他者や理念(正義、平等など)に捧げてほしいという点。(3)どんな文化的境界をも越えていき、そして同時に、自分自身の文化を愛してほしいという点。そして、(4)古い概念を「リミックス(remix)」して、自分の世代・時代にあった新しい言葉として再定義してほしい(re-define the words)という点である。以上の言葉は、ギャング生活へのピア・プレッシャーで満ちるストリートで育ち、ゲットーの青年に「大学へと進学する重要性」を自覚させるという「小さな勝利」に人生を捧げ、自身に染みついていた女性嫌悪(misogyny)や同性愛者嫌悪(homophobia)と闘い、ヒップホップ世代として人生を歩んできたパウエル氏の人生をそのまま反映させたアドバイスのように感じられた。

あらゆる人種(そして性別、性的志向、エスニシティ、階級)の団結を強調する講演の後、「(白人と非白人の分離を強調する)ブラックナショナリズムについてはどう思うか?」という質問をぶつけてみた。彼は返答としては、「自分の文化を誇ることは大事だが、それと同様に他の文化を尊重すべき」と述べ、マルコム X についても一言名前を出した程度であった。後に聞くところによると、当日はアメリカ領事館での講演ということで、講演の内容は「アメリカ」を意識して制限せざるを得なかったようだ。確かに、講演の内容も、アメリカの歴史を民主主義の進化の過程であるとする見方が強く出ているのではないと思われる。奇しくも、当日2月21日はマルコム X の命日であった。以前に、「Malcolm X is my hero... I wanna be just like him.」とコメントをしていた彼が、アメリカ領事館で語る内容を制限しなければならなかったことは、「キング牧師の夢」の(漸進的)達成を語るイベントとしては、あまりに皮肉な事実であったといえる。(※追記あり)

加えて、印象深かったのは、パウエル氏が今回初来日にあたって「多くの日本人が、アメリカに住む黒人よりも、黒人の歴史について深い知識と理解がある」ことに気づき、「驚きと喜びを隠せない」と語っていたことであった。その上で、彼は日本で黒人研究を学ぶ人へもっとも伝えたいこととして、「自分自身を愛し、自分の文化を愛すること」を強く訴えかけていた。一見当たり前の、しかし再考に値する彼の言葉は、日本(人)の視点から黒人研究を考える際の、ひとつのヒントになるのではないだろうか。

<追記>

先に述べた「皮肉な事実」に関する見方は、いささか修正をしなければならない。というのも、後にパウエル氏にメールで確認を取ったところ、確かに講演会のタイトルはアメリカ領事館側が用意したものであったが、具体的な内容についての制約やチェックは全くなかったというのだ。つまり、先述の「皮肉な事実」という見方とは、多かれ少なかれ「深読み」であった。そしてこの「深読み」とは、私の中のある種のバイアスによるものであった。日本で黒人研究に興味を持つ非黒人の私が、愛による全人類の幸せを願うパウエル氏の講演についてこのような「深読み」をしてしまうことは、それこそあまりに皮肉な事実であったといえる。そしてそのことに気付いたとき、彼の訴えていた「古い概念をリミックスし、再定義すること」の真意、重要性を、身を持って感じたのであった。

入 会 者

阿津坂 祐樹(あつさか ゆうき) 氏

所属：立命館大学 国際関係学部学生

(2013年4月から同志社大学大学院 グローバルスタディーズ研究科 アメリカ研究クラスター)
会員の皆様、はじめまして。阿津坂と申します。まだ専門といえるものではありませんが、ヒップホップ研究に興味を持っております。中でも最近、ヒップホップの商業化と新自由主義、ポストフォーダイズムといったテーマに注目をしてきました。また、SHIPS(Seminar for Hiphop Studies)という団体を通じて、日本におけるヒップホップ研究や Edutainment(教育・エンターテイメント)のあり方を模索しております(www.facebook.com/ships2012)。今後、例会や全国大会などで、会員の皆様にお会いできますことを楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

編集後記

今回「会員からの投稿」欄に奇しくも学会や講演会について三つの報告が寄せられた。投稿者のアフリカ研究をめぐる雑感とイギリスでのアフリカ研究学会の様子、韓国での英文学会における黒人研究の動向、そして来日されたアフリカンアメリカンのケビン・パウエル氏が語るキング牧師の現代人へのメッセージと、現在世界で行われている黒人研究の一端を知ることができた。パウエル氏の講演会に私も参加させて頂いたが、彼は「歴史の流れに注視して思考する重要性」を強調された。それはたとえば、南北戦争後の奴隷制廃止、公民権運動、そしてオバマ大統領誕生という大きな出来事の間になんかあり、歴史がどのように動いていったのかを考えるといったことである。会報編集にあたり、歴史の流れ(黒人研究の流れ)を縦軸とし、現在の黒人研究の動向を横軸として、自分なりに一つ一つの出来事を頭の中で mapping する楽しさを味わった。黒人研究の会会報が会員方々の研究に少しでも役立つ情報を提供できる場となることを望み、今後も多くの投稿をお願いする次第である。

(井上 怜美)

会計からのお願い

2012年度会費6千円の未納の方は下記郵便振替まで至急お振込み下さい。

振替番号： 00910-6-148435

名義人： 黒人研究の会

＜編集＞ 黒人研究の会・編集部
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学国際関係学部・加藤恒彦研究室気付

＜編集者＞ 井上 怜美
